JazzDay Kasukabe

国内トップアーティスト「PINK BONGO」による演奏。普段なかなか聴けない本物の音が生で聴ける。

ジャズデイかすかべ 熱い思いがまちを変える！

「何かやろうぜ」から始まったジャズデイ成功までの軌跡と現在。

２０１３年７月27日、春日部市中央町第四公園で、「ジャズデイかすかべ２０１３夏」が開催された。ジャズデイかすかべは、プロやアマチュアのジャズバンドの演奏や歌を「生で」、しかも「無料で」聴くことができるまちの名物イベント。

２００６年11月に始まり、翌年から、春、夏、秋と、年に３回のペースで開催され、この夏で21回目を迎える。

今や、まちの顔ともなったジャズデイの、知られざる誕生の秘密を追った。

Kasukabe

夏のジャズデイには欠かせない「ザ昭和歌謡団」。

男たちの思いが一つにつながりジャズデイが誕生

今では当たり前のように開催されているジャズデイかすかべ。7年前、1回目の開催に漕ぎつけるまでには、春日部のまちの男たちの熱い思いと苦労があった。

話は「三つの場所」でくすぶっていた男たちの思いに始まる。

一つ目は市内の楽器店。1999年頃だった。市内で建築会社を営み、トランペットを愛する成田孝満さんが、昭和楽器の北川房男さんに「ビッグバンドを作りたい。春日部でジャズを演奏する場所がほしい」と相談していた。

毎回いろいろな演出で会場を沸かせる成田さん。

二つ目は2002年、商工会議所の会議室だ。商工会議所が中心となって運営する「春日部TMO（まちづくりを運営・管理する団体）」のメンバー、船岡克己さんや前澤初夫さんが「春日部駅周辺の中心市街地を活性化したい」と議論を交わしていた。

三つ目は2006年8月の初旬、春日部駅近くの老舗蕎麦屋巴屋（ともえや）の店内。ジャズが大好きで、自分の店の座敷で「お座敷ライブ」を開催していた店主の佐藤孝さんと、グラフィックデザイナーでレコード会社も持つ勝谷清一さんが熱弁をふるっていた。「座敷では限りがある。いろんなイベントをやって春日部でジャズを広めたい」

三つの思いは人づてに伝わり、2006年8月末に一つになった。

「ジャズで春日部ににぎわいをもたらそう！」

商店会役員に一人一人会って、協力を呼びかける日々

思いが重なってからの男たちの動きは早かった。出演者の交渉・手配は北川さんと勝谷さん。「やるからには、メインゲストは超一流のジャズ

プレイヤーを呼びたい」と出演者探しに奔走した。

地域のイベント開催には地元商店会の協力は不可欠だ。春日部駅周辺には三つの商店会がある。春日部TMOのメンバーはその各商店会の役員に会い、理解を求めた。初めは難色を示した店もあったが、徐々に理解を得ていった。

会場の設営は、春日部西口商店会連合会副会長の山﨑正雄さんが買って出た。常設ステージがない頃は、そのたびに鉄パイプで組んでいた。ステージマネジメントは北川さん。「大音量では地域の住民の方に迷惑がかかる」と公園の周囲を回り、音量チェックに細心の注意を払った。

こうした彼らの熱い思いが実り、わずか3カ月後の11月、記念すべき第1回ジャズデイかすかべが開催された。会場はたくさんの聴衆でにぎわい、イベントは大成功を収めた。

ジャズデイが市民に笑顔を、まちに活気をもたらした

7年経った今では、全国からジャズ好きのボランティアや出演者が来るようになった。お客さんも年を追うごとに増えている。

第1回から見に来ているという男性は、ジャズデイかすかべの大ファン。「住まいから歩いて行ける場所で、生のジャズ演奏が聴けるなんて最高ですね。青空の下でビールを飲みながら、まったりとジャズを聴いていると幸せな気分」と笑う。

また、地域の三つの商店会は、ジャズデイかすかべの開催を機に、自らもさまざまなイベントを開催するようになった。「ジャズで春日部ににぎわいをもたらそう」という男たちの夢は着実に実を結んでいる。

春日部TMOのメンバー。前列左から尾堤 宏さん、勝谷清一さん、北川房男さん、成田孝満さん、後列左から船岡克己さん、佐藤松夫さん、前澤初夫さん、山﨑正雄さん。

「ドリキン」の愛称で親しまれている「ドリーム・スイング・キングダム」。